

## 実践報告

### 地域協働型介護予防・健康教育支援プログラム(協働ゼミ)の効果検証 - 社会人基礎力の発達との関係 -

#### Verifying the effects of a community-based collaborative care prevention and a health education support program (so-called a collaborative research meeting) - A relationship with developments in basic skills as members of society.

村松 由紀<sup>1)</sup> 郷原 志保<sup>1)</sup> 高瀬 寛子<sup>2)</sup> 須佐 公子<sup>1)</sup> 奥平 寛奈<sup>1)</sup>  
太田 眞<sup>3)</sup> 琉子 友男<sup>3)</sup> 杉森 裕樹<sup>1)</sup> 田中 博<sup>4)</sup>  
Yuki Muramatsu<sup>1)</sup> Shiho Gohara<sup>1)</sup> Hiroko Takase<sup>3)</sup> Kimiko Susa<sup>1)</sup> Hirona Okudaira<sup>1)</sup>  
Makoto Ota<sup>5)</sup> Tomoo Ryushi<sup>4)</sup> Hiroki Sugimori<sup>1)</sup> Hiroshi Tanaka<sup>2)</sup>

1) 大東文化大学スポーツ・健康科学部看護学科 2) 埼玉医科大学保健医療学部看護学科 3) 大東文化大学名誉教授 4) 大東文化大学スポーツ・健康科学部スポーツ科学科

1) Department of Nursing , Faculty of Sports & Health Science,Daito Bunka University 2) Department of Nursing , Faculty of Health & Medical Care , Saitama Medical University 3) Professor Emeritus, Daito Bunka University 4) Department of Health Science , Faculty of Sports & Health Science,Daito Bunka University

#### 抄 録

〔目的〕学生と高齢者が共に学ぶ教育プログラムの作成を行い、この介入評価と学生自身の社会人基礎力醸成の関係を探索する。

〔方法〕大学生(1~4年18~41名、平均19.7~21歳)と65歳以上5~6名(平均72.2~75.6歳)の少数班編成し、数か月おきにアクションリサーチ介入を実施した。定量データは記述統計とMann-Whitney U検定、定性データはテキストマイニングの共起性と階層的クラスタ分析を行った。

〔結果〕クラスタ分析は高齢者【老化の自覚】【協働ゼミへの感謝】、学生【老化の身体変化を知る】【老化の進行を防ぐ】、社会人基礎力共起性サブグラフ検出は【チームで働く力】「傾聴力」、【考え抜く力】「創造力」「課題発見力」、【前に踏み出す力】「働きかける力」等が強く共起、定量データ結果「働きかける力」(p<.041)、「課題発見力」(p<.014)、「傾聴力」(p<.028)を支持した。

〔考察〕高齢者は学生と共に学ぶ事へのやりがいを実感し、数か月おきの協働ゼミは両者の関係構築、他者理解を進展させた。社会人基礎力能力要素のうち、相手の意見を丁寧に聴く力、現状を分析し課題を明確にする力、他者に働きかける力等の発達に影響を与えた。

本研究は科研費17k12425の助成を受けた。

キーワード：地域包括ケアシステム 世代間交流 アクションリサーチ 教育介入プログラム 社会人基礎力

### ABSTRACT

**Objectives.** Our aims are to build an education program in which students and the elderly can learn together and explore the relationship between evaluating the intervention and fostering basic skills of students as members of society.

**Methods.** Undergraduate students (1st to 4th year: 18 to 41 students; average age: 19.7 to 21.0 years) and the elderly ( $\geq 65$  years: 5 to 6 people; average age: 72.2 to 75.6 years) were divided into small groups. Action research interventions were held irregularly. The quantitative data were analyzed by using descriptive statistics and the Mann-Whitney U test. Co-occurrence analysis applied in text mining and hierarchical clustering were used for qualitative data analysis.

**Results.** Hierarchical clustering showed “Awareness of aging” and “Appreciation toward collaborative research meetings” in the elderly and “Realizing physical changes with aging” and “Preventing progression of aging” in students. Regarding co-occurrence subgraph detection in basic skills as members of society, dense co-occurrence patterns were seen in “Teamwork skills,” “Attentive listening,” “Ability of deep thinking,” “Creativity,” “Ability to identify issues,” “Ability to step forward,” “Ability to work with others,” etc., which supported the following quantitative data: “Ability to work with others” ( $p < 0.041$ ), “Ability to identify issues” ( $p < 0.014$ ), and “Attentive listening” ( $p < 0.028$ ).

**Discussion.** The elderly enjoyed learning together with students. Collaborative research meetings held irregularly facilitated a relationship between the two and deepened understanding of others. Developments in the following basic skills as members of society: Listening attentively to others’ opinions, Ability to analyze current situation and clarify issues, and Ability to work with others, were affected.

**Keywords :** the community-based integrated care system, intergenerational collaboration, action research, educational intervention program, basic skills as members of society

## I. 背景と研究目的

厚生労働省（以下、厚労省）は、包括的な自立生活支援サービスの提供システムとして、2025年を目途に地域包括ケアシステムの構築を推進している<sup>1)</sup>。

地域包括ケアシステムの対象は法的には65歳以上だが、2015年厚労省による「誰もが支えあう地域構築に向けた福祉サービスの実現」<sup>2)</sup>において、地域に暮らす高齢者、障害者、児童、生活困窮者がその状況に合った支援が受けられる体制を構築するとした。また、2016年に地域共生社会の実現に向け、高齢者、障害者、子ども等が、地域で自立した生活ができるよう地域住民による支え合いと公的支援の連動による切れ目のない支援をめざす<sup>3)</sup>とした。その後、厚労省は2020年、健康寿命の延伸、人生100年時代に向けた「全世代型社会保障」の実現を目指し、あらゆる世代を対象とした社会保障全般にわたる持続可能な改革を基本方針<sup>4)</sup>とした。

2024年は、診療報酬、介護報酬および障害福祉サービス等のトリプル改定であり、2025年に向けた地域医療構想の取り組み、医療DX（デジタルトランスフォーメーション）の実現等を重要課題に中央社会保険医療協議会において意見交換が進められている<sup>5)</sup>。このように地域包括ケアは、2014年制定以来国民のさまざまなニーズに対応するための新しい支援体制づくりへと進化している。

地域共生社会に生きる地域包括ケアの担い手は、地域社会全体の構成員であり、地域住民らによる自主的な地域包括ケアモデル事例や地域の諸主体が地域特性に応じた仕組等が多く報告<sup>6) 7)</sup>されている。また、地域で行われる世代間交流は、高齢者世代に「生きがい効果」や「介護予防効果」があるとの研究成果<sup>8) 9)</sup>もある。

地域にとって近隣に立地する大学も固有の資源であり、学生も同様に地域包括ケアシステムの重要な一員としてその活躍が期待される。そこで今回、大学と地域住民が、それぞれの強みを活かし、地域包括ケアシステムのしくみの中で共に生き、共に学びあう介入プログラムを試作した。また、学生が地域社会の異世代の人たちと関わることで、「社会人基礎力」の涵養に寄与できるのではないかと考えた。

ところで、社会人基礎力とは「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」から構成される。「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくため

に必要な基礎的な力」と定義され、人生 100 年時代に求められるスキルとして 2006 年に経済産業省により提唱<sup>10)</sup>された。社会で活躍できる人材育成のための指標として、さまざまな職場に共通して求められる 3 能力(12 能力要素)からなる。

「前に踏み出す力」とは、主体的に失敗を恐れず自ら一歩前に踏み出し、他者と協力し粘り強く乗り越える能力であり、〈主体性〉〈働きかける力〉〈実行力〉の能力要素で構成される。また、「考え抜く力」は、物事の改善や課題解決の方法について十分納得のいくまで考え抜く能力であり、〈課題発見力〉〈計画力〉〈創造力〉で構成される。さらに、「チームで働く力」は、仕事の専門化や細分化が進展する中で、多様な人と協働するために自分の意見を的確に伝え、意見や立場の異なるメンバーを尊重し目標に向かって協力できる能力であり、〈発信力〉〈傾聴力〉〈柔軟性〉〈状況把握力〉〈規律性〉〈ストレスコントロール力〉で構成される<sup>11)</sup>。経済産業省は、3 能力(12 能力要素)が発揮できた具体的行動例を挙げ、「社会人基礎力レベル評価基準表」(表 1)を作成した<sup>12)</sup>。また列挙された具体例は、この内容に限るものではなく求める人材像等に応じてそれぞれの学校や職場で開発することが推奨されている。

本研究は、地域包括ケアシステムのしくみの中で、異世代が共に生きるための関係構築と、共に学び合うその活動を通じ、学生の社会人基礎力形成との関係を探求することを目的とする。

#### 用語の操作的定義

「地域協働型介護予防・健康教育支援プログラム」：本研究に参加する大学生と大学が立地している地域に在住する高齢者の組み合わせで、世代間交流を行い、相互理解・信頼関係を図り、その地域の特性とくらしや健康に関わる地域課題について、協働的に学びあう学修プログラムである。

高齢者は、本プログラムに参加することで「生きがい」を感じる、あるいは介護予防効果が期待される。学生は異世代の人たちと関わることで「社会人基礎力」の涵養が期待される。高齢者の期待される効果については、先行研究で報告<sup>13) 14)</sup>されていることから、本研究では主に学生の社会人基礎力に焦点を当てる。

表1 社会人基礎力(経済産業省)3能力(12能力要素)

能力	能力要素	定義	発揮できた例(具体的な行動例)
前に踏み出す力(アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分がやるべきことは何かを見極め、自発的に取り組むことができる</li> <li>自分の強み・弱みを把握し困難なことでも自信を持って取り組むことができる</li> <li>自分なりに判断し、他者に流されず行動できる</li> </ul>
	働きかける力	他人に働きかけ巻き込む力	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手を納得させるために、協力することの必然性(意義、理由、内容等)を伝えることができる</li> <li>状況に応じて効果的に巻き込むための手段を活用することができる</li> <li>周囲の人を動かして目標を達成するパワーを持って働きかけている。</li> </ul>
	実行力	目的を設定し確実に実行する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>小さな成果に喜びを感じ、目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができる</li> <li>失敗を怖れずに、とにかくやってみようとする果敢さを持って、取り組むことができる</li> <li>強い意志を持ち、困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる</li> </ul>
考え抜く力(シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	<ul style="list-style-type: none"> <li>成果のイメージを明確にして、その実現のために現段階でなすべきことを的確に把握できる</li> <li>現状を正しく認識するための情報収集や分析ができる</li> <li>課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めている</li> </ul>
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業のプロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てられる</li> <li>常に計画と進捗状況の違いに留意することができる</li> <li>進捗状況や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正できる。</li> </ul>
	創造力	新しい価値を生み出す力	<ul style="list-style-type: none"> <li>複数のもの(もの、考え方、技術等)を組み合わせて、新しいものを作り出すことができる</li> <li>従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出すことができる</li> <li>成功イメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探している</li> </ul>
チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	<ul style="list-style-type: none"> <li>事例や客観的なデータ等を用いて、具体的にわかりやすく伝えることができる</li> <li>聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる</li> <li>話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えている</li> </ul>
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	<ul style="list-style-type: none"> <li>内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解することができる</li> <li>相槌や共感等により、相手に話しやすい状況を作ることができる</li> <li>相手の話を素直に聞くことができる</li> </ul>
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見を持ちながら、他人の良い意見も共感を持って受け入れることができる</li> <li>相手がなぜそのように考えるかを、相手の気持ちになって理解することができる</li> <li>立場の異なる相手の背景や事情を理解することができる</li> </ul>
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動することができる</li> <li>自分にできること・他人ができることを的確に判断して行動することができる</li> <li>周囲の人の状況(人間関係、忙しさ等)に配慮して、良い方向へ向かうように行動することができる</li> </ul>
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手に迷惑をかけないよう、最低限守らなければならないルールや約束・マナーを理解している</li> <li>相手に迷惑をかけたとき、適切な行動を取ることができる</li> <li>規律や礼儀が特に求められる場面では、粗相のないように正しくふるまうことができる</li> </ul>
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>ストレスの原因を見つけて、自力で、または他人の力を借りてでも取り除くことができる</li> <li>他人に相談したり、別のことに取組んだりする等により、ストレスを一時的に緩和できる</li> <li>ストレスを感じることは一過性、または当然のことと考え、重く受け止めすぎないようにしている</li> </ul>

各能力要素を発揮した例はこの内容にかぎるものではない 文献12)より転載・一部改変

表2 協働ゼミ内容

<p><b>【目的】:</b> 地域包括ケアシステムのしくみの中で、多世代が支えあい、共に生き共に学びあう社会を構築するための基盤となる良好な関係形成と、B町C地区の地域特性とその課題について理解・共有を図る協働活動を行う。</p> <p><b>◆プログラム1:2019年2月実施(2日間)【学修目標】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 世代の異なる双方の良好なコミュニケーションを図り、相互理解、信頼関係を構築することができる。</li> <li>2. B町C地区について関心を持ち、その地域の概要について理解することができる。</li> </ol> <p><b>1日目:</b></p> <p><b>《導入編》:世代間交流、他者理解・自己理解の促進</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①チームビルディング:自己紹介、アイスブレイクゲーム</li> <li>②みんなの年表づくり:日本や世界の出来事とメンバー全員のライフイベントを書き込み、オリジナル年表を作成</li> </ol> <p><b>《理論編》:高齢者とB町の理解を促進するための土台作り</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①講義1:概要:高齢者が現状の身体機能を維持し生活するために必要な知識、健康寿命延伸に注目されているサルコペニア、ロコモティブシンドローム、フレイルの基礎知識と社会参加の関係について 講師:A大学スポーツ・健康科学部スポーツ科学科共同研究者</li> <li>②講義2:概要:B町の歴史や地域特性等を理解する内容(沿革、人口構成、産業、交通、健康長寿への取り組み等)について 講師:B町政策財政課長</li> <li>③グループワーク:講義から得た知識や情報を整理し、2日目に実施するフィールドワークの計画立案 各班「計画シート」作成:ルートや観察ポイントなど整理</li> </ol> <p><b>2日目:《実践編》:B町C地区の現状把握と課題点の整理</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①フィールドワーク:オリエンテーション後、全員でB町C地区を徒歩で観察。ルートは班ごとに異なり、前日に作成した「計画シート」記載内容を念頭に気づいた点をメモや写真に記録、リフレクションの材料とした。各班の高齢者が、自身の居住地であるB町C地区の説明とガイド役を担当</li> <li>②グループワーク:フィールドワーク後のリフレクション、気づいた場所の状況を模造紙に絵や言葉で表現。その場所を選んだ理由や思いも書き込む</li> <li>③全体発表と意見交換</li> </ol> <p>データ収集:①「相互理解・信頼関係の形成」について:5段階評価尺度自記式調査票(①②学生・高齢者に2日間実施) ②「対象地区の関心・理解」について:フィールドワークおよびリフレクション終了後の自由記述</p> <p><b>◆プログラム2:2019年6月実施(1日間)【学修目標】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 加齢に伴う身体機能の変化について講義と疑似体験から理解する。</li> <li>2. B町C地区の地域特性とその課題について理解・共有ができる。</li> </ol> <p><b>《理論編》:加齢に伴う高齢者の身体的変化の理解を促すことをねらう</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①講義3:概要:老化による身体変化のメカニズム、要因、具体的な身体の特徴について 講師:A大学スポーツ・健康科学部看護学科共同研究者</li> </ol> <p><b>《実践編》:高齢者疑似体験</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 高齢者疑似体験装具の装着:各班の主に学生が着用し、段差のある場所や階段の昇降、エレベーター利用、財布から小銭を出し買い物行動等の実際を体験。班メンバーの高齢者は、自身の日常生活体験談を伝え、状況の補足を行う。</li> </ol> <p>「高齢者疑似体験装具」:加齢に伴う身体の変化を疑似体験するための装具。関節可動域;重りやサポーターを装着し、身体の動きを制限。指先の動き;軍手を着用細かな動きを制限。感覚器系の視覚・聴覚:色付き眼鏡やゴーグル、イヤーマフを装着し、色別や視野、聴力の変化を疑似的に体験する教材。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>②グループワーク:高齢者から生活と健康面で困っていること、生活と健康面で将来的に不安に思うこと、大学や若い世代に期待すること等の情報収集し、ニーズを把握する。B町C地区に関する情報の確認と課題点の整理、各班で対策をディスカッションする。</li> <li>③全体発表</li> </ol> <p>データ収集:①「高齢者の理解」について:講義および高齢者疑似体験の感想・気づきの自由記述(学生・高齢者に実施) ②「社会人基礎力:3能力(12能力要素)到達度の自由記述および3段階評価/(学生に実施)</p> <p><b>◆プログラム3:2020年2月実施(1日間)【学修目標】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. B町C地区の地域特性とその課題を整理し班メンバーで共有する。</li> <li>2. これまでの取り組みから導き出されたアイデアの中から、実現可能な具体的方向性を見出し言語化できる。</li> </ol> <p>グループワーク ①地域特性と課題点・改善点を、ブレインストーミングとKJ法で整理 ②出されたアイデアを分析枠組みに基づいて分類</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>② 全体発表と意見交換</li> </ol> <p>データ収集:①「社会人基礎力:3能力(12能力要素)到達度の自由記述および3段階評価/(学生に実施)</p>
---

「協働ゼミ」: 学生および高齢者が, 少人数のゼミナール形式で「地域協働型介護予防・健康教育支援プログラム」に参加し学修すること. 大学カリキュラムとして編成された正規授業ではないため, 参加による単位修得はない.

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン: アクションリサーチによる介入研究

アクションリサーチは, 研究者が現場に入りその現場の人たちも研究に参加し, とともに研究作業を進め社会そのものに影響を与え変化をもたらす研究活動である<sup>15)</sup>. 本研究では, 介入プログラム参加者が研究参加者となり, 協働的な研究作業に加わり実践していくことからこの研究方法を選択した.

### 2. 研究参加者

研究参加の同意を得た A 大学看護学科, スポーツ科学科, 健康科学科の学生と A 大学が立地している地域の B 町 C 地区在住の 65 歳以上の高齢者とした.

学生は, 学年の指定は設けないが, なるべく低学年を中心に募集を行った. また, 高齢者は, A 大学スポーツ科学科が実施する筋力維持向上を目的としたトレーニング教室の参加者に研究参加を募った. 高齢者の参加条件として, 日常生活に支障がなく介入プログラム(以下, 協働ゼミ)開催場所まで自力で移動することができ, 継続して参加可能であることとした.

### 3. 研究期間

2019 年 2 月～2020 年 2 月

### 4. 協働ゼミ内容および実施方法

協働ゼミの学修目標を達成するために必要な基礎的な知識を講義形式で学び(理論編), その後グループワーク等の実践的な学び(実践編)を組み合わせた(表 2). また, 各班には教員を 1 名ずつ配置し実践編のファシリテーター役割を担った.

#### 1) プログラム 1 について

相互理解や関係づくりを促し, 協働ゼミ実施対象地域である B 町 C 地区の地

域特性を理解する内容とし、2日間実施した。

## 2) プログラム2について

プログラム1終了から4か月後に実施した。加齢に伴う身体機能の変化の理解を促す内容とした。

## 3) プログラム3について

プログラム2終了から8か月後に実施した。プログラム1のフィールドワークで得たB町C地区に関する情報とプログラム2の体験を踏まえ、住民である班メンバーの高齢者から生活上のニーズ等を確認し、地域特性と課題点を整理した。また、その対策は、ブレインストーミングとKJ法により、出されたアイデアを枠組みに基づいて分類し、まちづくりアクションプランの作成をめざした。分類枠組みは、縦軸・横軸を十字に引き、問題の優先度と解決の難易度から直交の4つの指定エリアを設定し、KJ法の付箋をそれぞれ空間配置した。

縦軸を上方にいくほど優先順位が高く、下方は優先順位が低い。また、横軸は左方にいくほど解決可能であり、右方にいくほど解決困難とした。

これら一連の介入プロセスから学生の社会人基礎力との関連を検討した。

## 5. 対象地域

B町は、D県のほぼ中部に位置し、人口は約1万4千人、高齢化率45.9% (2020年現在)<sup>16)</sup>である。B町人口の半分を占めるC地区は、首都圏50km圏内の好立地ベッドタウンとして1970年代から開発され生産年齢人口が急増したが、現在は高齢化の進展が著しい。町内に鉄道はなく、電車を利用する場合は、隣接する市の駅を利用する。主要な移動手段は町内を巡る路線バスと「デマンドタクシー」である。

## 6. データ収集方法

協働ゼミ各プログラムの学修目標に沿って、その到達状況を以下の方法で収集した。

### 1) 相互理解・信頼関係の構築と地域の理解

「相互理解・信頼関係の形成」「対象地区の関心・理解」について「とてもそう思う～全く思わない」の5段階評定尺度による無記名自記式のアンケートを

プログラム1の1日目および2日目に対象者全員に実施した。フィールドワークによる対象地区の理解については、リフレクション終了後、気づいた点、気になった場所や感想等を班ごとに自由記述を求めた。

## 2) 加齢変化の理解

プログラム2の「高齢者の理解」について、講義や高齢者疑似体験後の感想や気づきを対象者全員に自由記述を求めた。

## 3) 社会人基礎力の3能力(12能力要素)

3能力(12能力要素)からなる社会人基礎力の評価は、実施した行動を事実として正確に捉えることを基本とし、学生自身が自分の行動をふりかえる自己評価を基に評価することが望ましいとされる<sup>17)</sup>。そのため本研究では、プログラム2を学修した学生が、後続のプログラム3の学修体験から現れた行動の変化や発揮された力を3能力(12能力要素)のレベル評価基準(表1)で把握するという経済産業省が推奨するデータ収集方法を選択した。

3能力(12能力要素)の発揮できた具体的な例を参考に参加学生に記入してもらい定性データとした。また、12能力要素ごとの到達度を評価するために「発揮できなかった(1点)」「何とか発揮できた(2点)」「困難な状況でも発揮できた(3点)」の配点とし、定量データとした。

## 7. 分析方法

プログラム1は2日間ともに参加した者、プログラム2および3においてもどちらも参加できた者を分析対象とした。定量データは、統計解析ソフト IBM SPSS Ver.27.0 を使用し、記述統計および独立サンプルによる Mann-Whitney による U 検定を行った。有意確率は両側検定で  $p < .05$  とした。自由記述による定性データは、計量テキストマイニング分析ソフト KH Coder (Ver.3)<sup>18)</sup> を用い、統計的に分析した。テキストデータを形態素解析し、3回以上頻出語の抽出を行った。共起ネットワーク作成と階層的クラスター分析により、語と語の関連性を確認した。共起ネットワークによる語の関連性分析では、媒介中心性によるサブグラフの検出と Jaccard 係数を算出し、併せて KWIC コンコーダンスを用いて語の前後の文脈について原文確認を行い、社会人基礎力 3 能力 12 能力要素間の関係性および抽出語の関係性の確認を行った。

## 8. 倫理的配慮

本研究対象者に対し、研究の学術的背景と目的、研究方法、プライバシーおよび個人情報の保護と研究参加は自由意思であり、同意後も同意撤回書による辞退が可能であること等を口頭と書面により説明した。また、本研究は授業科目とは一切関連がないが、研究対象の学生には、研究協力の有無にかかわらず学生への評価に影響はしないこと、学生生活において不利益を受けないことも説明した。なお、本研究は、大東文化大学「医学系研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施した（承認番号：DHR18-004）。

## III. 研究結果

### 1. 研究参加者の概要

学生は A 大学スポーツ・健康科学部 3 学科の 1～4 年 36 名、高齢者は地域の体操教室や地域包括支援センター開催のサロン活動等に積極的に参加する 5 名であった。研究参加者の概要および学生の属性について表 3 に示す。

### 2. 相互理解・信頼関係の構築および地域の理解

プログラム 1 の学修目標を評価するために 2 日間同様のアンケートを実施した。「信頼関係の形成」を問う項目で、「そう思う」および「とてもそう思う」と回答した割合は 1 日目で 89.1%，2 日目で 100% であった。また、「対象地区の関心・理解」を問う項目では、1 日目 95.1%，2 日目 97.6% であった。

フィールドワーク後の自由記述内容について、計量テキストマイニング分析を行った。その結果、フィールドワークに関連するテキストデータの総抽出語数は 927 語、異なり語は 246 語が抽出された。総抽出語のうち出現回数の多い上位 5 語は、「人」（13 回）、「少ない」（12 回）、「坂道」（12 回）、「空き家」（10 回）、「高齢」（10 回）であった。次に、頻出語の共起性について、共起ネットワーク（サブグラフ検出）で確認した（図 1-a）。

共起ネットワークとは、出現パターンの共起の程度が強い語やコードを線で結んだネットワーク図である。強い共起関係ほど太い実線で示され、出現数の多い単語ほど大きな円で表現される。本研究のノードは、「空き家－雑草－坂道－高齢」を中心に「街灯－路地－増やす」と「多い－大変－状況－ゴミ－重要

表3 研究参加者の概要

	度数 (人)	性別		平均年齢 (±SD)
		女性	男性	
プログラム1 (n=41) 班編成：計5班				
学生	36	27	9	19.17 (±0.7)
高齢者	5	2	3	72.2 (±6.0)
プログラム2および3 (n=23) 班編成：計3班				
学生	14	9	5	20.6 (±0.9)
高齢者	5	2	3	73 (±5.0)

(再掲) 研究参加学生の基本的属性

				度数 (%)
プログラム1 (n=36)				
学科		看護学科	スポーツ科学科	健康科学科
性別	男性	3(8.3)	2(5.5)	4(11.1)
	女性	18(50.0)	3(7.3)	6(16.6)
学年	1年	21(58.3)		
	2年		3(8.3)	2(5.6)
	3年		2(5.6)	8(22.2)
プログラム2および3 (n=14)				
性別	男性	1(7.1)	2(14.3)	2(14.3)
	女性	4(28.6)	2(14.3)	3(21.4)
学年	2年	5(35.7)		1(7.1)
	3年		2(14.3)	4(28.6)
	4年		2(14.3)	

「一町一買い物」が強く共起していた等、バブルプロット計6つのネットワークを確認した。さらに、階層的クラスター分析の結果、5つのクラスターが抽出された(図2)。KWICコンコーダンスを用いて語の前後の文脈について原文確認を行った。以下、〈 〉はクラスターを構成する語、「 」はクラスター前後の語を精読しその内容を要約した。

第1クラスターは〈増やす〉〈街灯〉〈路地〉〈場所〉〈雑草〉〈高齢〉〈坂道〉〈空き家〉で構成され、「B町C地区の現状」と命名した。狭い〈路地〉に〈街灯〉がなく〈空き家〉には〈雑草〉が繁っている、〈坂道〉が多く〈高齢〉者には負担だ。第2クラスターは〈調べる〉〈現状〉〈確認〉〈不便〉〈防犯〉〈少ない〉〈町〉〈多い〉〈大変〉〈買い物〉〈ゴミ〉〈状況〉で構成され、「B町C地区の課題点」と命名した。路地に街灯が少ない〈町〉の〈防犯〉に関連する対策が〈少ない〉〈現状〉を〈確認〉〈調べ〉た。坂道が〈多い〉、〈ゴミ〉出し〈買い物〉が〈大変〉と〈状況〉に気づいた。第3クラスターは〈減る〉〈交通〉〈利用〉で構成され、「状況の整理と再利用の検討」と命名した。公園〈利用〉者の姿がなく、対象地区で働く世代や子どもの数が〈減った〉。〈交通〉の便悪い、多い坂道を活用しランニングや自転車競技等運動に〈利用〉できないか、空き家を有効に〈利用〉できないかを模索した。第4クラスターは〈若者〉〈住む〉〈対策〉〈人〉で構成され、「対策のヒント(ヒト)」と命名した。このクラスターは高齢者に関連する記述ではなく〈若者〉に向けた語が多い。〈若者〉の人口が減少していることに注目し、〈若者〉が利用しやすい施設整備や町の景観を良くし〈若者〉が住みやすい街づくりの必要性が示された。第5クラスターは〈交流〉〈公園〉〈居場所〉〈作る〉〈集まる〉で構成され、「対策のヒント(居場所)」と命名した。子どもから高齢者まで幅広い世代が〈交流〉するために〈集まる〉〈居場所〉〈作り〉が対策のキーになるとし、利用されていない〈公園〉に着目していた。

## 1. 加齢変化の理解

プログラム2の高齢者疑似体験装具を装着後、自由記述による感想を高齢者および学生それぞれに求め、階層的クラスター分析から語と語の関連性を確認した。まず、高齢者のテキストデータ総抽出語数は446語、異なり語は189語が抽出された。階層的クラスター分析は、3つのクラスターに分類された。

第1クラスターは〈道〉〈痛い〉〈歩く〉〈装着〉〈自分〉〈体験〉で構成され「老化を学ぶ」と命名した。第2クラスターは〈感じる〉〈居る〉〈老化〉〈出来る〉で構成され「老化の自覚」と命名した。第3クラスターは〈ありがとう〉〈若い〉〈勉強〉〈実感〉〈思う〉〈実際〉で構成され「協働ゼミへの感謝」と命名した。



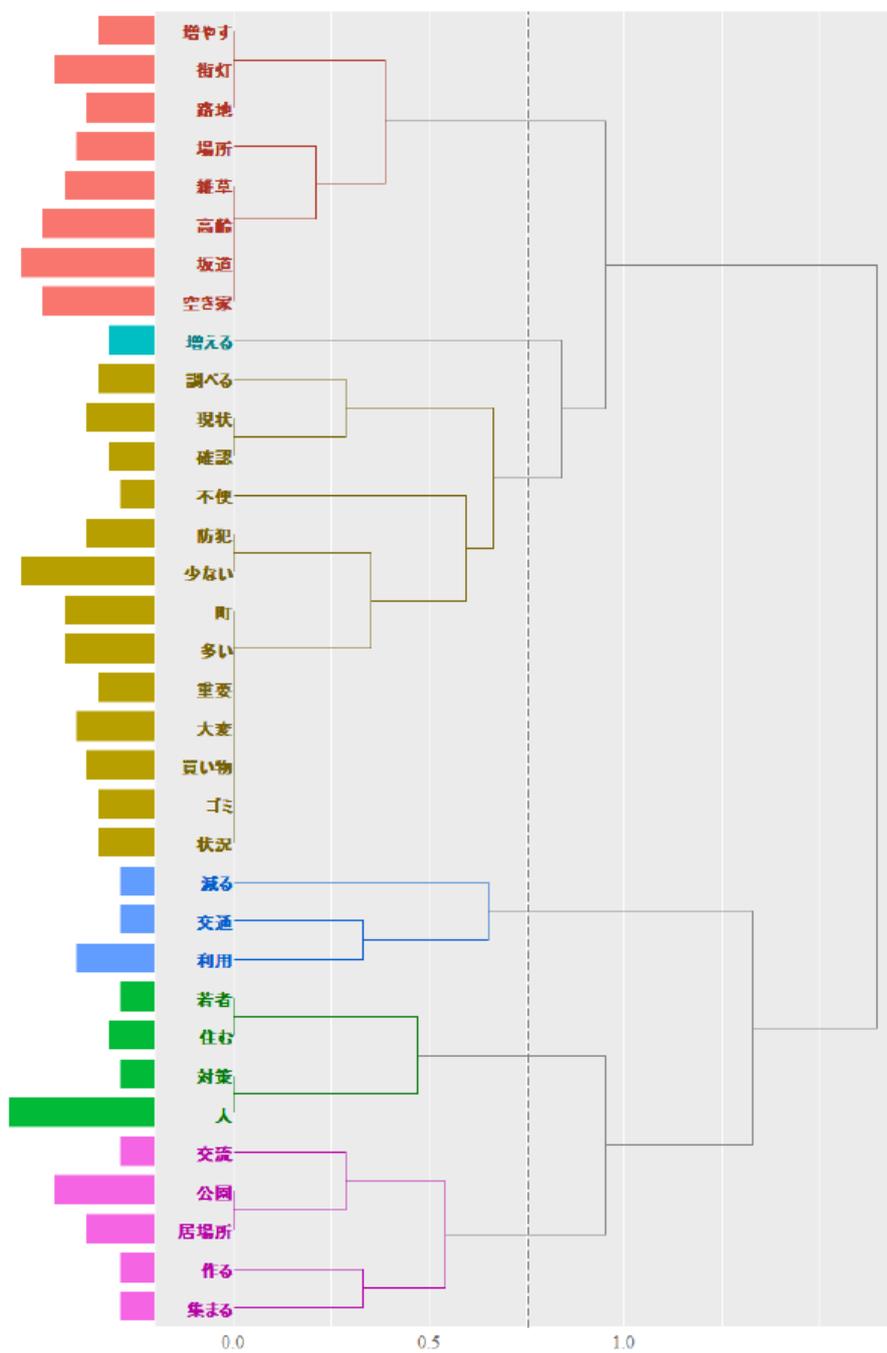


図2 階層的クラスター分析によるデンドログラム(フィールドワーク)

次に、学生のテキストデータ総抽出語数は 450 語、異なり語は 177 語が抽出され、4つのクラスターに分類された。第1クラスターは〈知る〉〈初めて〉〈登

る)〈老廃物〉〈筋肉〉〈認知〉で構成され「老化の身体変化を知る」と命名した。

第2クラスターは〈怖い〉〈足〉〈高齢〉〈階段〉で構成され「段差が怖い」と命名した。第3クラスターは〈体験〉〈筋力〉〈運動〉で構成され「老化の進行を防ぐ」と命名した。第4クラスターは〈老化〉〈必要〉〈思う〉で構成されており「老化を学ぶ必要性」と命名した。(図3)。

#### 4. 社会人基礎力の評価

##### 1) 社会人基礎力を構成する12能力要素得点

社会人基礎力を構成する12能力要素を得点化し、プログラム2および3の比較を行うためにMann-WhitneyのU検定を行った。その結果、有意差のあった能力要素は、〈働きかける力〉(p<.041)、〈課題発見力〉(p<.014)、〈傾聴力〉(p<.028)であった。

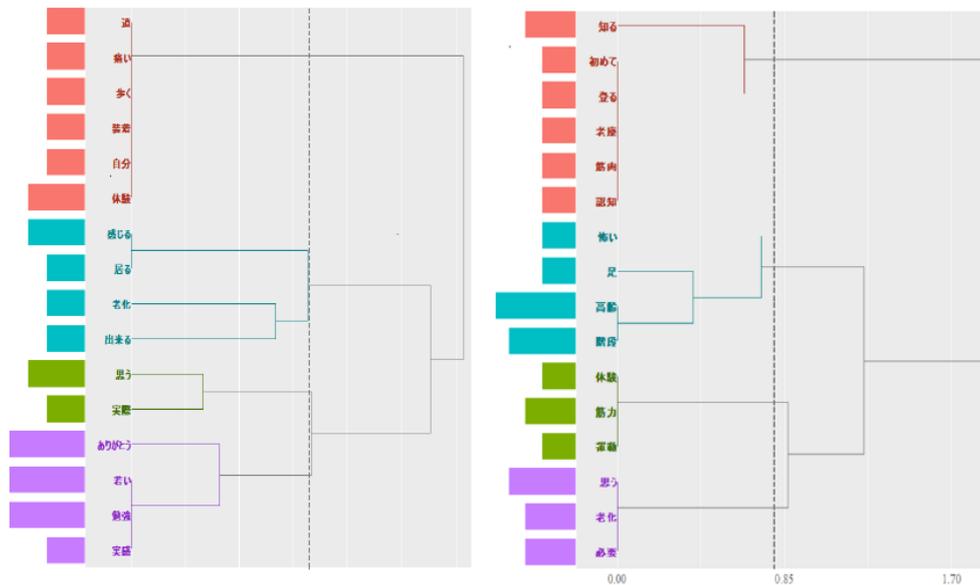


図3:階層的クラスター分析によるデンドログラム高齢者疑似体験装具装着  
(左:高齢者感想 右:学生感想)

##### 2) 共起ネットワーク

社会人基礎力に関連するテキストデータの総抽出語数は2132語、異なり語は429語が抽出された。総抽出語のうち出現回数の多い上位5語は、「意見」(42回)、「自分」(26回)、「理解」(13回)、「相手」(12回)、「考える」(11回)。

「人」(11回)、「話」(11回)、「伝える」(11回)であった。次に、頻出語の共起性について、共起ネットワーク(サブグラフ検出)の中心に位置し、強く共起しているバブルプロット「意見－自分－伝える－ストレス－理解」は、社会人基礎力「チームで働く力」の能力要素〈傾聴力〉〈柔軟性〉〈ストレスコントロール〉を構成する内容に共起し、特に〈傾聴力〉を示す語の頻出が確認された。また、「考え－新しい－協力－積極－目的－実行－提案－会話－他人－プログラム－見出せる」が共起し、社会人基礎力「前に踏み出す力」を構成する要素の〈働きかける力〉〈実行力〉を示す語が頻出された。さらに、「考える－相手－目標－時間－向ける－少し－話す－見つける－出す－決める－話し合う－グループ」が共起し、社会人基礎力「考え抜く力」を構成する要素の〈課題発見力〉を示す語の頻出等、バブルプロット計8つのネットワークを確認した(図1-b)。

#### 5. まちづくりアクションプランの作成

模造紙に問題の優先度と解決の難易度を分類し、KJ法の付箋をそれぞれ空間配置した。SNS等を活用した情報共有・発信方法、学生と地域の交流企画、大学の知的資源や若者の知識を地域に還元する等の具体的な取組みが提案された。

### IV. 考察

#### 1. 相互理解・信頼関係の構築について

「信頼関係の形成」を問う項目は、1日目より2日目の方が、よりコミュニケーションが図られ、信頼関係形成を実感し相互理解が促進された。

内閣府による「こども・若者の意識と生活に関する調査報告書」<sup>19)</sup>によると、地域の人との関わり方で『楽しく話せるときがある』について「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答した15～19歳(n=1,293)の割合は63.5%、20～24歳(n=1,181)では74.0%であった。また、地域の人と『いつもつながりを感じている』について、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答した15～19歳は76.7%、20～24歳では87.0%であった。この報告から家族形態の多様化やコミュニティの変化等も影響要因として考えられるが、現代の多くの若者にとって地域の人との関わりは希薄であり、「地域」は身近な日常の一部とは言えない。しかし、若者と高齢者における世代間交流

と精神的健康状態との関連で、「交流あり群」と「交流なし群」の比較において「交流あり群」のほうが、両世代ともに精神的健康状態が良好であった<sup>20)</sup>との報告がある。このことから若者・高齢者共に交流を通じて社会的なつながりが醸成されると考えられる。さらに、若者と高齢者との交流は、高齢者が有する知識や経験を次世代へ伝承する機会となり、社会的役割を担うことが生きがい、やりがいに繋がる<sup>21)</sup>。そのため、異世代間の相互理解や信頼関係の形成をめざす交流の場は、ある一定の効果が期待され、厚労省がめざす地域共生社会の実現に向けた重要なソーシャル・キャピタルであると考えられる。

## 2. 地域特性の理解について

文部科学省は、大学改革実行プラン<sup>22)</sup>において地域再生の核となる大学づくりを策定した。大学が地域の課題解決に取り組むために、学生が社会の現実の課題解決に参加することで実践力を育成し、主体的に学び次代を生き抜く力を育むことを前提とした教育方針である。その具体的な教育方法にフィールドワーク等を挙げている。本研究においても地域特性とその課題についてフィールドワークを行い、状況や課題を把握した。大学が立地している地域を対象としたフィールドワークは、学生にとって身近な教材において主体的な学びが誘導されやすく、フィールドワークによる学修成果を地域に還元し、地域再生の一助とすることも可能であり、学生の対象地域に対する愛着が増す等も期待できる<sup>23)</sup>。

B町の地域特性として、台地状の丘陵地と細かく入り込む低地からなり、C地区は坂道が多い。このことはインターネット情報ではわかりにくく、実際に現地を歩いて実感できるフィールドワークの成果である。地形の特徴から高齢者にとってゴミ出しや買い物等の負担が大きいと学生は感じている。また、雑草が繁る空き家も目立つが、「人－対策」「少ない－防犯」「現状－確認」等が共起され、防犯対策の必要性を実感したことは、階層的クラスター分析の結果とも一致した。C地区の現状から課題解決の糸口としてスペースの整備と再利用の検討が示され、地域課題の対策のヒントを「ヒト」「居場所」という2側面から検討していることが示された。

### 3. 加齢変化の理解

本研究対象者の高齢者は、地域包括支援センター開催のサロン活動等に積極的に参加するいわゆるアクティブシニアである。また、加齢に伴う身体の変化は自覚しているが、積極的な活動をこれからも可能な限り維持するために、必要な知識や体力を獲得しようと努力するサクセスフル・エイジングである。

従来「エイジング」は機能低下や喪失等、退行していく側面が強調されたが、「サクセスフル・エイジング」は、エイジングの否定的側面のみでなく肯定的な捉え方に注目する概念である<sup>24)</sup>。研究対象高齢者は、孫世代の学生と共に学ぶことへの謝意を表し、学生への肯定的なフィードバックを行っている。

Erikson<sup>25)</sup>のジェネラティビティ論は、人間の生涯の心理社会発達論で中年期・高齢期に必要な要素として「次世代を確立させ導くことへの関心」と定義された概念である。Eriksonはジェネラティビティを中高年期の発達課題とし、年齢と共に概念範囲が拡大するとしている。老化による身体的変化や責任ある公的地位からの退職等、絶望感を乗り越える時に役立ち、死の受容にもつながると高齢期には重要とされる。このジェネラティビティは、子ども・若者との交流への参加または活動を促す。異世代への肯定的なフィードバックはジェネラティビティを向上させ、さらに活動強化につながる一連の正の循環が確認できる<sup>26)</sup>とされる。

本研究対象高齢者において本来のサクセスフル・エイジングを備え、なおかつ協働ゼミへの参加により若者との世代間交流を通じ、ジェネラティビティの向上に寄与できたのではないかと推察できる。

一方、本研究対象者の学生は、看護学科、スポーツ科学科、健康科学科において、それぞれ専門性の高い学科であり、「人」を対象とした学問領域である。高齢者からの体験談や助言を傾聴し、高齢者への理解をさらに深めている態度から「人」への関心は一定程度備わっていると推測する。

一般的に高齢者との交流が乏しい若者の場合、高齢者に対するエイジズムが問題となると言われている。エイジズムとは、「あらゆる年齢集団に対する批判的もしくは肯定的なあらゆる偏見と差別」と定義<sup>27)</sup>される。エイジズムという場合は否定的な側面に注目されることが多く、ステレオタイプの年齢に関連する差別としてとらえられる。親しい高齢者親族との接触が少ない、加齢に関す

る知識が乏しく加齢の事実を知らないほどエイジズムが強い（年齢差別・偏見がある）<sup>28)</sup>との報告がある。一方、看護学生を対象とした高齢者とのふれあい交流前後での看護学生のエイジズムの変化について、交流体験は、高齢者の理解を深めエイジズムを弱める効果があった<sup>29)</sup>との報告がある。さらに、高齢者の若者に対する否定的態度に関する要因分析については、若者との接触頻度が低い高齢者ほど若者への嫌悪・回避傾向がある<sup>30)</sup>と報告している。

今回、協働ゼミ前後に双方の抱くエイジズムを把握していない。本研究対象者は、元来異世代との接触頻度がありエイジズムが弱いのかもかもしれないが、既往研究の知見から、協働ゼミ活動を通じて世代間交流を蓄積させることで元々弱いエイジズムがさらに低減した可能性も排除できない。さらに若者に焦点をあてた場合、加齢に関する正しい知識と理解について、理論編・実践編で獲得していることもその一助ではないかと推察できる。

厚労省が目指す地域共生社会とは、人と人、人と地域が「丸ごと」つながることを前提としている。そのためには、異世代の交流・相互理解は不可欠である。ジェネラティビティが発揮され、高齢者がこれまで培った英知を次世代に還元し、社会全般のあらゆる年齢集団に対する肯定的なエイジズムの流布が求められる。

#### 4. 社会人基礎力の発達

社会人基礎力を構成する12能力要素を得点化した結果、有意差を認めた〈働きかける力〉、〈課題発見力〉、〈傾聴力〉は、テキストマイニングの共起性サブグラフの結果を支持した。社会人基礎力は、基礎学力や専門的知識・スキルのみならず人として社会生活を送るための責任感、公共心、基本的マナー等、人間性や基本的生活習慣との相互作用により、良い経験や活動を通して循環的に向上する。また、部活動やサークル、アルバイト等、日常生活における経験が社会人基礎力の伸長につながる<sup>31)</sup>。学生は、大学生活全般の学修やこれまでの日常生活経験等により社会人基礎力を伸長させているものと思われる。

##### 1) 働きかける力

他者との協働に不可欠な客観的積極性を生む力として、他人に何かを頼んだり勧誘したり、他者への信頼や共感できる能力も求められる。例えば看護学教

育における看護実習では、これまでケア等、看護師に必要なスキル修得に重点が置かれたが、近年共に働く他職種への働きかけ等、高い社会人基礎力が求められる。そこで看護基礎教育の段階で看護の対象者に協働して健康問題に取り組むように声をかける事ができ、指導者、教員、グループメンバー等周囲を巻き込んで実習を進めることが出来る力の育成が重要である<sup>32)</sup>。社会人基礎力「前に踏み出す力」の要素〈働きかける力〉のみ今回の協働ゼミにおいて有意差を認めた。この要素の発揮できた例として、相手を納得させるために協力することの必然性(意義, 理由, 内容)を伝えることができる等があることから、異世代で構成するグループメンバーとのディスカッション等で培われたのではないかと評価する。

## 2) 課題発見力

人が社会的活動をする際は、ある目標に向かって状況の問題を発見し、解決法を考えるという問題解決プロセスをたどる。その問題解決の第一歩は問題点の発見であり、問題を理解するためには知識や情報が重要である。文献、インターネット、インタビュー、アンケート手法、フィールドワーク等による知識獲得や情報収集は有効<sup>33)</sup>である。協働ゼミの学修方法は、関連する知識や理論を学んだうえでフィールドワークや体験学習を実施している。このことから、獲得した知識や情報を目標に合わせて再構築し、問題や課題を明らかにする力に影響を与えたと推察する。

## 3) 傾聴力

「チームで働く力」における〈傾聴力〉は単に人の話を「聴く」ことだけではない。相手の言いたいこと、伝えたいことを引き出すことも含まれるため、時には質問等で相手の思いや意見を正確に引き出すところまで含まれ、他者軽視の傾向が高いとこの力は発揮されない<sup>34)</sup>。協働ゼミのプログラム2および3の活動を通じて、異世代のグループメンバーへの敬意や共感が醸成されたと推察する。

## V. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、3能力(12能力要素)のレベル評価基準を活用し、自己評価にて社会人基礎力を把握している。そのため研究参加者自身の主観的感覚として表

記されている点が社会人基礎力評価としての妥当性には課題が残る。また、研究参加者の学科・学年、正規のカリキュラムの相違等、個人的属性による影響要因が存在するためプログラムの評価には限定的な側面が存在する。

本研究の対象学生は、他者との良好な関わりを前提とする医療系およびスポーツ系の専門学問領域に所属する大学生と日々の暮らしを積極的に活動するアクティブシニアである。いずれの世代も、元来から人との交流に困難感がなく世代間交流が自然な形で肯定的に展開された可能性は否定できない。また、対象地区は1地区限定であるため本研究手法と結果がすべての教育機関に応用可能かは不明である。さらに研究期間中に蔓延した COVID-19 の影響は大きく、アクションプランの実際を行動するレベルに及んでいない。したがって、今後はより広範な地域を選出し、多様な分野の学生と地域在住高齢者を対象とした継続的な研究の蓄積が必要である。

## VI. 結論

学生と高齢者が共に学ぶ教育プログラムの作成・評価し、学生自身の社会人基礎力醸成との関係を探索した。階層的クラスター分析による加齢変化の理解は、高齢者は【老化の自覚】【協働ゼミへの感謝】、学生は【老化の身体変化を知る】【老化の進行を防ぐ】が抽出された。社会人基礎力の共起性サブグラフ検出は、「前に踏み出す力」〈働きかける力〉、「考え抜く力」〈課題発見力〉、「チームで働く力」〈傾聴力〉が強く共起、定量データの「働きかける力」( $p < .041$ )、「課題発見力」( $p < .014$ )、「傾聴力」( $p < .028$ )の結果を支持した。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました研究参加者のみなさまに深く感謝申し上げます。本研究は科学研究費補助金(基盤 C: 17k12425)の助成を受けて実施した。また研究成果の一部は第43回日本看護科学学会学術集会にて発表した。

## 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

## 参考文献

- 1) 厚生労働省 地域包括ケアシステム : [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/kaigo\\_koureisha/chiiki-houkatsu/](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/) (2023年1月25日閲覧)
- 2) 厚生労働省 地域共生社会のポータルサイト誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現 - 新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン - : <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokuyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/bijon.pdf> (2023年1月25日閲覧)
- 3) 厚生労働省 「地域共生社会」の実現に向けて : <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000184346.html> (2023年1月25日閲覧)
- 4) 厚生労働省 令和2年度診療報酬改定の基本方針 : <https://www.mhlw.go.jp/content/12404000/000592925.pdf> (2023年1月26日閲覧)
- 5) 厚生労働省 中央社会保険医療協議会(中央社会保険医療協議会総会)第536回(2023年1月18日) : <https://www.mhlw.go.jp/content/12404000/001039392.pdf> (2023年1月24日閲覧)
- 6) 厚生労働省 地域包括ケアシステム実現に向けて 地域包括ケアシステム構築へ向けた取組事例 : [https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/kaigo\\_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/model.pdf](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/model.pdf) (2023年1月25日閲覧)
- 7) 厚生労働省 地域包括ケアシステム実現に向けて 事例を通じて、我がまちの地域包括ケアを考えよう「地域包括ケアシステム」事例集成～できること探しの素材集～ : [https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/kaigo\\_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/jirei.pdf](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/jirei.pdf) (2023年1月25日閲覧)
- 8) 黒岩亮子(2018):日本における世代間交流の展開, 社会福祉, 第59号, 85-95
- 9) 長寿社会における生涯学習の在り方について～人生100年いくつになっても学ぶ幸せ「幸齢社会」～ : [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/fieldfile/2012/03/28/1319112\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2012/03/28/1319112_1.pdf) (2023年8月21日閲覧)
- 10) 経済産業省 社会人基礎力 : <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> (2023年12月1日閲覧)
- 11) 箕浦とき子, 高橋恵(2018):看護職としての社会人基礎力の育て方, 第2版, 日本看護協会出版会, 4-8, 東京
- 12) 経済産業省(2008):今日から始める社会人基礎力の育成と評価～将来のニッポンを支える若者があふれ出す!～, 28-29, 角川学芸出版, 東京
- 13) 前掲書8)
- 14) 前掲書9)
- 15) 筒井真優美, 草柳浩子, 川名るり(2010):アクションリサーチ入門 - 看護研究の新たなステージへ, ライフサポート社, 15, 横浜市
- 16) 地域医療情報システム(日本医師会) : <https://jmap.jp/facilities/search> (2023年2月23日閲覧)
- 17) 前掲書12) 26-27.
- 18) 樋口耕一(2021):社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して 第2版, ナカニシヤ出版, 東京
- 19) 「こども・若者の意識と生活に関する調査報告書」(令和4年度) : <https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r04/pdf-index.html> (2023年5月5日閲覧)
- 20) 根本裕太, 倉岡正高, 野中久美子他(2018):若年層と高年層における世代内/世代間交流と精神的健康状態との関連, 日本公衛誌, 12号, 719-729
- 21) 前掲誌9). (2023年8月21日閲覧)
- 22) 大学改革実行プラン : [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryu/attach/1322871.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryu/attach/1322871.htm) (2023年8月21日閲覧)
- 23) 長谷川直樹(2020):大学教育でのフィールドワークによる地域に対する意識形成の効果に関する分析 - 飯塚市中心市街地の事例研究 -, 日本建築学会技術報告集, 第62号, 412-417
- 24) 谷井康子(2001):サクセスフル・エイジング概念分析, 日本看護科学学会誌, Vol.21(2), 56-63
- 25) E H エリックソン, J M エリックソン, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳(1989):ライフサイクルその完結, みすず書房, 161, 88-89
- 26) 雀 恩熙(2019):理論をふまえた高齢者と子ども・若者の交流に関する研究の到達点-高齢者への効果を中心とした文献レビュー-, 福祉社会開発研究, 第14号, 10
- 27) Palmore EB(1999):Ageism: negative and positive.2nd ed., springer, New York.
- 28) 原田謙(2004):都市部の若者男性におけるエイジズムに関する要因, 老年社会科学, 第29巻4号, 485-492
- 29) 森幸弘, 福田峰子, 松田武美(2016):看護大学生の高齢者に対するエイジズムとイメージの変化 - チャレンジサイト活動による高齢者とのふれあい交流から -, 生命健康科学研究所紀要, Vol.13, 86
- 30) 原田謙, 小林江里香, 深谷太郎他(2019):高齢者の若者に対する否定的態度に関連する要因 - 世代間関係における「もうひとつのエイジズム」 -, 老年社会科学, 第41巻1号, 34
- 31) 経済産業省制作・調査 河合塾:みんなの教育(wakuwaku-catch.com)『社会人基礎力育成の手引き - 日本の将来を託す若者を育てるために 教育の実践現場から』4章 評価・振り返りの取り組み, 岐阜大学医学部看護学科, 323-324
- 32) 前掲書31). 1章 なぜ社会人基礎力か, 36-42
- 33) 前掲書31). 1章 なぜ社会人基礎力か, 45-46
- 34) 前掲書31). 1章 なぜ社会人基礎力か, 56-57